はじめに

日本はすでに西暦六四五年には大化元年と定め、最初の元号が誕生し、古代統一国家を形成した。また、七世紀後半から八世紀初頭頃に対外的な国号を「倭国」から「日本」へ改めている。以来一二〇〇年を超える歴史をもつ。一方アメリカは一八世紀後半に独立をとげた若い国である。しかし近代国家としての経歴でいえば、立場は逆転する。ピューリタンによって建国以来、近代民主主義が先行したアメリカ合衆国は逆に、一八五四（嘉永七）年にペリー提督の艦隊が来航し、日本との間で神奈川条約（日米和親条約）を結ぶ。そして一八五八（安政五）年にはアメリカ総領事のタウンゼント・ハリスの尽力により日米修好通商条約が締結された。こうして日本の鎖国は終わり、日本が開国後初めて海外に使節団を派遣したのは、隣国アジアでもヨーロッパ諸国でもなく、一八六〇（万延元）年、アメリカ・ワシントンへ条約批准書を交換するためであった。こうして日本は二百余年にわたる西洋に対する遅れを一気に取り戻そうと、明治維新期、急速な改革に乗り出すのである。

一方、アメリカにとって、イギリスや他のヨーロッパ諸国と違って、日本との間は言語、宗教、人種、道徳、倫理のどれをとっても共通点はなかった。

こうした差異があってもアメリカは近代民主主義の導入をはじめ、人的、物的支援を惜しまず、日本近代化推進の良きモデルになったのである。

そして、欧米が日本に与えた教訓の一つは、列強に支配されている世界で生き延びるには、日本が自ら軍事力を高めなければならないということであった。後進国を震撼させた欧米の帝国主義、植民地政策の中に、明治維新後、近代世界の中に遅れて登場し、真似したにすぎないのである。列強への対抗と資本主義の同化という相異なる座標軸を相互に関連させながら、全体としては軍事力を強化し、西洋化を駆け足で進めてきたのである。

このような時代背景から日本のナショナリズムは植民地化の可能性に対する予防措置として成立し、西洋列強とアジアの植民地化の間で、いかに日本の独立と独自性のある資本主義を発達させるかが課題となったのである。アメリカとの関係でいえば、両国はお互いに貿易でも補完関係で、やがて通商面で深い関係を築く。特に日本はアメリカに石油の大半を依存し、友好と協力の関係を育んできた。その間の人的交流をみても明らかである。

日露開戦当時、黄禍論が渦巻く中で、ロシアと戦うのは不利であり、これを打破する任を負ってアメリカの世論を親日に変えさせる工作をしたのが金子堅太郎である。金子はハーバード大学留学時の同窓で、アメリカ大統領であるセオドア・ルーズベルトに接触し、日露休戦、和解の仲介を依頼している。また、高峰譲吉らは、民間外交としてアメリカ世論に友好の運動を展開した。交戦持続能力に限界のあった日本にとってポーツマス和平会議がルーズベルトの仲介で開かれ、日露戦争は終結した。

ところが、日露戦争での日本の勝利が大きな転換点となった。日本の勝利が明らかになると、英米両国はロシアの勢力が満州から駆逐されたことから、かねてアメリカの主張していた満州における機会均等・門戸

開放政策に対する、潜在的脅威として日本を考えるようになったからである。

福澤諭吉の「脱亜論」でも言っているように、清国も韓国も、主権国家としての責任能力が十分でなかったことは、この間の歴史の流れを見れば明らかである。したがって、日本と中国との全面戦争は避けられた可能性はあった。しかし、中国大陸をめぐる列強の利害の対立と後押しする各国の世論が複雑に絡み合って解決を遅らせたのである。歴史を反省の視点だけで見るのではなく、歴史の視野に入る事実を見過ごすべきではないだろう。

そしていったいなぜ、平和を名とする地球最大の海・太平洋を舞台に、日米が三年九カ月にわたる戦争をしなければならなかったか、それを想起すれば、誰もが両国は戦争せねばならないほどの事態に至ったのか、もう一度、問いたくなるのである。

戦時の大本営参謀であった瀬島龍三は、「太平洋戦争は自存自衛の受動戦争」であり、開戦の責任の一端は、そこまで追い込んだアメリカにあると言っている。この考えは、日本では徳富蘇峰ら有識者の大勢の考えである。そして、もし日本の大陸政策が有終の美を収め得るチャンスがあったとすれば、それは満洲事変から支那事変への移行を絶対に防止し、万やむを得ざる場合も、支那事変から大東亜戦争への発展を絶対に阻止すべきであったのである。一方、日本政府からすれば、普遍的な原則を掲げながら、パリ講和会議で日本が提案した人種平等の条項を退け、日本やアジアへの内在的理解をもたないウィルソン外交には抵抗があったのは事実である。

バルチック艦隊を壊滅させた日本海軍からフィリピンを防衛できるかという問題がアメリカ政府内で提起

され、その反日感情が日本人移民の排斥という形で現れた。そしてアメリカに生じた非白人国・日本に対する脅威感、中国への同情も重なり、日米関係は次第に緊張化する。このように日露戦争以降のアメリカは一方的に対日関係悪化の道を進んだように思えてならない。一方、両国の利害が激しく対立した不幸な時期となっても、日米両国政府の外交関係者はじめ、異文化間の壁を越えて生まれる個人と個人のつながりを頼り、信頼関係をつなぎとめようとする民間外交で努力をした人たちがいた。

戦前、日本社会にアメリカを紹介した民間人の多くは、青少年時代をアメリカで生活し、現地の教育を受けていた。幕末から明治初年に通詞（通訳）として日米交渉の場で活躍したジョン万次郎（中浜万次郎）、一八六四（元治元）年、函館を脱国して、アメリカへ渡り、初めてアメリカの大学、アーモスト大学を卒業し、帰国後、同志社を設立した新島襄がいた。

本書では太平洋戦争前、日米の葛藤が深まる中で、日米の懸け橋にならんとした両国の人物、八人を取り上げた。近代以降、密接な日米経済関係という舞台装置を作り上げ、国民外交に心血を注いだ近代日本資本主義の父・渋沢栄一、アドレナリンを発明し、世界的科学者として、日米を往来した高峰譲吉、同志社の教授であり、渋沢と親しく、『日米問題』を書いたシドニー・ギューリック、ジョーンズ・ホプキンス大学で学び、アメリカ研究の成果である『日米関係史』を書いた新渡戸稲造、宣教者であり、建築家・実業家で日本へ帰化したW・M・ヴォーリズ、親日家で、戦前最後の駐日大使のジョセフ・グルー、アメリカへ留学し、クリスチャンとしてアメリカへ実質上亡命し、戦後ＩＣＵの初代学長になった湯浅八郎、日本生まれで、ハーバード大学教授となり、戦後駐日米大使も務めたエドウィン・ライシャワー、以上の八人である。いず

れも日米関係に大きな足跡を残し、二つの国を祖国と考えた人たちである。

本書は不幸な太平洋戦争に至る両国の複雑な政治・社会情勢のもとで、彼らは何を考え、どう行動したかという視点で、日米友好の絆に迫ってみようと思う。

経済人、学者、外交官、教育者、宗教家などで仕事や役割、活動した時期も異なるが、世界における日米両国の複雑な立場を感じ取り、両国の可能性と危険性に思い悩み、アメリカと日本の重要な仲介者の一人になりたいと願っていた。

そして日本を開国させ、帝国主義を教え、日本に近代文化を持ち込んだアメリカこそ、二〇世紀日本の運命を左右するかもしれないと思い、戦争以外の方法を強く望んだのである。

本書はアメリカへの留学経験、国際結婚、滞米、滞日経験、ビジネス交流などを異なった立場から、両国の平和を願った八人の人的交流と生き方を解明した。その意味で、本書は民間版、もう一つの日米関係史ともいえるだろう。

二〇一二年一〇月

志村　和次郎

誇り高き賢人たち

―もう一つの日米関係史―

目次

はじめに……i

第一章　先進国をめざして近代化を急いだ日本……1

対外折衝と西洋文明の移入　1
近代化推進に貢献したお雇い外国人　3
列強の帝国主義に仲間入り　4
日清戦争と三国干渉の影響　6
欧米の黄禍論への対応　9
日露戦争とポーツマス講和　10
第一次世界大戦後のアメリカの脅威　12
パリ講和会議で人種差別撤廃を提案　13

第二章　日露戦争後の日米関係……15

日露戦争後のアメリカの反日感情　15
満州事変と迷走する国家戦略　17
満州国の建国と大陸政策　19
一九一五年以後の日米外交・経済関係　21
排日運動と「新移民法」の制定　24
葛藤と亀裂が深まった日米関係　26

太平洋問題調査会の活動　28
日独伊三国同盟と日米交渉の破綻　30

第三章　渋沢栄一による日米経済外交……33
明治維新政府で能吏発揮　33
日本の経済界をリードした渋沢栄一　36
会社経営に道徳を持ち込む　38
官尊民卑の否定と教育支援　40
帰一協会の設立　41
小村外相から民間外交の要請　42
渋沢による国民外交の展開　45
日米の人脈づくりと在米日本人会　46
排日移民法に対する世論工作　48
日米葛藤を和らげた人形交流　49

第四章　日米を祖国にした科学者・実業家の高峰譲吉……52
ワシントン・ポトマック河畔の桜　52
アメリカを研究拠点に選ぶ　54
英語教育は幼少時から受ける　56

工部大学校で化学技術の基本を学ぶ　57
応用化学を実践的に修学　60
イギリスへ留学後、肥料会社を興す　61
タカヂアスターゼの開発に成功　63
アドレナリンの画期的発明　65
特許料収入で大資産家になる　66
日本のパートナーは三共の塩原又策　67
理化学研究所の創設を主導　69
ニューヨークに日米友好団体の設立　70
アメリカの財界人との交流　72
民間経済外交の限界　73

第五章　排日運動の非を説いたシドニー・ギューリック……76

アメリカン・ボードの宣教師で来日　76
同志社時代のギューリック　78
学究的だったギューリックの日本人論　80
ギューリックと渋沢栄一の出会い　82
渋沢栄一の帰一協会に参加　84
国際正義に反する排日運動の非を説く　86

排日移民法の背景と論争　88
『日米問題』の発刊と日米和解の訴え　91
「青い目の人形」を日本の子どもたちへ　92
日本から返礼の「市松人形」　94
受け継がれる友情人形　95

第六章　太平洋の懸け橋・国際人の新渡戸稲造……97

札幌農学校に学ぶ　97
アメリカ・ドイツ留学　98
メアリー・エルキントンと国際結婚　99
母校・札幌農学校教授になる　100
名著『武士道』で日本人の思想を伝える　101
『武士道』とプロテスタントの精神の接合　103
アメリカ研究の成果である『日米関係史』　104
教育者としての熟練期・一高校長　107
日米交換教授第一号としてアメリカへ　108
請われて東京女子大学長に就任　110
国際連盟事務局次長としての活躍　112
日米の友好を訴えた太平洋会議　113

第七章　隣人愛を実践し、日本へ帰化したメレル・ヴォーリズ……116
近江八幡に根をおろした文化人　116
キリスト教伝道の志　117
近江兄弟社の設立　118
近代建築の先駆・ヴォーリズの西洋館　120
社会貢献事業の積極的推進　121
ヴォーリズ精神と近江商人の共通性　122
教育家としても多才なヴォーリズ　124
一柳満喜子と結婚し、日本へ帰化　125
一柳満喜子が教育事業を推進　126
「天皇の人間宣言」を演出　128
昭和天皇を守ったヴォーリズの役割　130

第八章　戦前最後の親日派アメリカ大使・ジュセフ・グルー……133
日米関係の葛藤が始まった時期に着任　133
二・二六事件の衝撃　135
軍部の抗争と有能な人材の出現　137
日本の政治不安を読めなかった　139
相互理解と平和を訴える　140

日米開戦回避の努力　142
近衛・ルーズベルト会談の地ならし　144
存在した秘密報告書　146
国務次官・グルーの活躍　148
知日派人脈を遺産として残す　150
『滞日十年』の公刊とグルー基金　151

第九章　アメリカを慕ったリベラリスト・湯浅八郎……153

自己の信義を貫いた湯浅・徳富の家系　153
自主性を重んじた教育　156
単身アメリカへ留学し、自主的に進路を決める　158
京都帝国大学の農学部創設に関わる　160
心の故郷・民芸との出会い　161
滝川事件の発生　164
宿命的な同志社総長就任と退陣　165
叔父・徳富蘇峰の庇護　166
平和を求め、マドラス会議から再びアメリカへ　169
戦争中のアメリカでの活動　171
教会活動でジョン・F・ダレスを知る　174

太平洋戦争時のアメリカでの役割　176
湯浅八郎とララ物資　177
戦後、乞われて同志社総長に復帰　180
日米合作の国際基督教大学の創設　182

第十章　日本生まれのパートナー・エドウィン・ライシャワー……185
宣教師の学者の家庭で育つ　185
築地のアメリカンスクール　188
オーバリン大学・ハーバード大学院へ　189
日米開戦とハーバード大学燕京研究所　192
ライシャワーの天皇観　194
血は日本、教育はアメリカのハル夫人　196
駐日アメリカ大使になる　198
ライシャワー事件　199
真の日米パートナーシップ実現　200
日本はライシャワーの故郷だった　201

第十一章　友好の復活と戦後の日米関係……203
日本人の心を掴んだ戦後の復興援助　203

ドッジラインと朝鮮特需　204
戦後の豊かさの反動　206
ジョン・F・ダレスとサンフランシスコ講和条約　208
日本人は本当に愛国心を失ったか　211
歴史感覚をもって将来を観る　213
日米民間団体による交流　214
同盟国・アメリカは変わった　215
日米協調の新たな絆　217

あとがき……219

参考図書・文献……223

登場人物の日米関係年表……226